

永劫流転の衆生の上に

覚めゆく悶え

鳴りひびく鐘の音

同じような仕事が毎日くくり返されて一日二日と月日が流れる。毎日機械のように食い、機械のように働き、機械のように寝る。それで満足し、それだけで、感謝もなければ悶えもない日暮しが十年一日の如く続く。

「覚めよ！ 目覚めよ！」

鐘をつく音がする。その異様な音が聞くとはなしに耳に入る。聞くまいとしても聞くまいとしても、耳にさからう嫌な音が耳につく。

「目覚めよ！……」

今までは、その鐘の音が外から聞えると思った。然り、外から聞える。益々はつきり、益々声高く、権威ある日覚めよの声が堂々と厳肅に聞える。けれども、今は単に外からばかりではない。

「目覚めよ！…… 覚めよ！」 その消すことの出来ぬ、人間の業とも思えぬ厳肅な声が内に聞える。而して外と内との声が共鳴りをはじめていないか。外からの声なら耳をおおっていることも出来るけれども、今ははや、耳をおおっても、内から聞える。朝も聞える。夕も聞える。起きても聞える、寝ても聞える。

卑怯

「目覚めよ！……」

その声の厳肅さに、気味悪さに、その声をごまかそうとする。卑怯なる汝よ！。しかし、ごまかしたり、さげたり、消したりすることが出来ると思うのか。否そうした卑怯な態度をとろうとすれば、いよいよはつきり、益々高く、堂々として汝の心霊の扉をうつではないか。

卑怯なる人間は、この「目覚めよ」の声から遠ざかろうとする。内なる響をふき消そうとする。そうした卑怯なる、物おじした汝の態度、それが今日までの不徹底なる汝の生活を作ったのである。しかし、この上、この目覚めよの力の力をほろぼすことが出来ると思うのか。

知識を慕ふて

「目覚めよ！……」

じつと耳をすまして、その声を聞くこうとする。いったい、何をせよというのだ。何を目覚めよというのだ。

おお汝は、ついにその声に耳をそばだてはじめた。もつと聞きたい。「音なき音」「声なき声」その響の中には、世間から来る一般の声とは違った、もつと本質的な深い何ものかがあるように思える。一体、この「無言の言葉」は何を意味し、何を叫んで

いるのだ。この声の本質的な言葉がもつと、はつきり知りたい。そこにあなたの足が、先覚者のもとに出発する。

伸び得ぬ悶え

一、小学校卒業の時の友人を思い出す。ある者は、中学校、高等教育、大学まで卒業して、今は堂々な紳士となつて、相当の地位と名誉と尊敬とを受けている。それにひきかえて私は一生を百姓で草深い田舎に、名もない凡人として生きてゆかねばならぬ。我が身の不幸を思う時、何物かを呪い続けたい心さえする。

一、友の誰彼は、高等女学校を卒業した。そうして今は、見てさえ幸福らしい高等官の奥様であり、大実業家の奥様であり、学者の一家の主婦である。それにひきかえて、自分は家が貧しいために、女工となつて工場に通わねばならぬ。深く考えた時、哀愁の涙が、たった一人の月の夕、さめぎめと頬を流れる。

一、老いたる父母、幼き弟妹、それらをおいて、青雲の志にまかせて、都会に走ろうか。そこには、人間の幸福と、無意蔵の学問とが私を待っている気がする。思つただけでも仕事が手につかぬ。心のうちから複雑な声が聞えて来る灰色なる今日一日。一体私はどうすればいいのだ。

一、真面目に生きている者ほど馬鹿げた気がする。正直に働けという学校の先生の言葉が今の自分にはちつとも有難い言葉ではない。否、正直というような道徳は旧い過去の人の言葉であつて、それを蹂躪しつくした所に強い人間の歩みがあるような気がする。しかし、どうやら頭の中には亡霊のように動き出る心がある。どつちつかずの毎日が嫌々ながらも続いて、月日の流れに引きずられて行く。そうした悶え、いたいどうすればいいのだ。徹底した声が聞きたい。

一、農村の夜間補習学校をのぞく。暗い電燈の下に、夜は更けるのに、二三人の影しか見えぬ。新学期がはじまると数十人の青年の顔が見えたものを、一月二月とたつと、一人減り、二人逃げ、今ではこの有様である。この有様では教える先生にどうして元気が出よう。算盤の計算法もいい。農業科の肥料論もいい。漢文の巻一もいい。けれども、何時までもそうしたもので満足の出来ないあなたの心。何か求めたい。飽くことなきこの無限の求めをどうすればいいのだ。教育を受けた昔の友人が、「君これを読みたまへ、君のように精神的な人にはいい本だ。これは僕を近頃一番深めてくれた書物だ。」そう言つて貸してくれた。むさぼるようにして蔑んで見るが、さつぱりわからぬ所が多い。誰かほんとに導いてくれる人はいないか。これが真剣な農村青年の悶えではあるまいか。しかしそれよりもつと本質的な悶えがある。

本質的な煩悶

人生最後の勝利は、物質や、地位や、そんなものでないことは知っている。それは飽くほど知らされたことである。けれども、それを理論としては知りつつも自信がない。信じきれない。更にそうした世界に出たくても、今の自分にはそれが、生活されない。

家の老人たちが信仰に入れという。しかし何故に信仰に入らねばならぬのですかと問うて見た時、「それは死んだら地獄におちるからだ。死なない気でも、若い者でも死ぬるからね。後生の一大事に気づかせてもらわねば、おそろしいことだ。」といったつのお念仏していなさる。しかし私には、それよりも、もつとせつぱつまった悶えが心のうちにひらめいている。この悶えと宗教とは関係はないのか知ら。憧れるように寺院に足をかけて見る。しかしそこには、老人たちの享樂的な陶醉が嫌になる分でも、今のこの悩みには何の関係がない気がする。しかし過去の聖者たちが、宗教によつて人生の悩みから救われたという。それならばもつと、この私の悶えに根ざした道も説かれてあるにちがいない。ほんとの信仰の天地に出たいものだ。時々、深く考えぬく時、仕事さえ手につかぬことさえある。私は一体どうすればいいのだ。あなただつて、決して、盲目的に物質に走ろうとするのではない。宗教に反対するのではない。道徳に反逆こうとうというでもない。しかしその本質にふれないのだ。

農村をやたらに去ろうというのでもない。是が非でも家を棄てて逃げるといってもない。農村におれば農村で、家におれば家において、そこに深い意義を見出し、ほんとの向上をたどることが出来るならば、そこに満足し得るのだ。

死せる生活

一家の中においてさえ、父は一も金、二も田地、姉や妹は、美しい化粧と、派手な衣服を好む以外に何の自覚もなければ、理想もない。五人おれば五人がそれぞれ違つた世界を作つて五人が五様の世界に住んでおる。たまたまぬ寂しさと空虚とが家庭を灰色にしてしまう。新旧思想の衝突、肉と霊との戦い、時には、夕食後の一家に涙の悲劇さえ生れることがある。死んだ一家、死んだ生活、死んだ幽霊屋敷、とてもそれに堪えられぬ。世間から、更に、親の口からさえ、親不孝者だとの批難さえ受ける。しかし孝とは何なのだ。孝の本質は何なのか。自分はこれがいいと信じながら、これが正しいと信じながら、もつとと言うならば親の要求が全然間違つており、深い世界からの声でない時でも、それに盲目的に従わねばならぬのか。それでは、自分は精神的に死ぬるではないか。ここへ、徹底的な教えを聞かせてくれる者はないのか。この矛盾へ鉄槌を下し、もつと自分の心をはつきり知らせてくれる世界はないのか。そうしてこの家庭を根本的に救うことは出来ないのか。

人格者

「目覚めよ……目覚めよ!。」

過去の偉人たちの撞いた鐘の音が、今の私、現実の胸のうちに鳴るのが聞える。

「私は全く現代のあらゆる社会を見て憤慨にたへませぬ。ついに私を導く人を全ての社会に見出すことが出来ませんでした。」

こうした言葉をもらす青年がいる。私はこうした青年にあつた時、いいようのない寂しきを感じず。ほんとにあなたの心の鐘の声をはつきりさせてくれる人はなかつたのか。

いなとよ。あなたを導く人格者がいないという前に、あなたの心霊の奥底には、ほんとに、久遠の過去から永劫の彼方に、無始無終に鳴りつづける響きはゴーンゴーンと聞えているのか。

もしあなたが言うごとく人格者が一人もないならば、あなた自身がその人格者とならねばならぬ。けれども、釈尊も、ソクラテスも、それら過去の偉人聖者は、皆、心の底からの底なき深さから流れ来る響きに耳をすまし、その声をききわけ、それを説いた人たちのだ。聞けよ、外から肉身をとおしての叫びごえは、内からの鐘の音と合致するではないか。更に、耳をすまし、目をみひらいて聞こうではないか。見ようではないか。吾人の前には吾人を救い、光の天地に導いてくれる教えの何ものも大正の今の時代にはないだろうか。

寂寥

語らぬ星

静かな夜である。

河の水が音も立てず流れる。

空が一面に晴れて、無数の星が輝く。

久遠の神秘、名も知らぬ無数の星が無言に輝く。

私はたった一人来り、たった一人立ち、たった一人考えている。

大地は暗黒にとざされて、微風さえない。

永劫流転の我を抱いて、

無間の彼方に輝く星の一つ一つを見つめる時、

神秘の外に何があるう。

不思議の外に何があるう。

古往今来、かくして天空に星は輝いたであろう。

そうして私のように、地上から涙を通して星を見上げて、

解き得ぬ神秘に幾人かの人たちが驚いたであろう。

おお寂しい天空よ。

汝は何故に無言なのだ。

何故にこの神秘について語らぬのだ。

汝は何故に知り得ぬ謎を有するのだ。

知り得ぬ私の過去について、私の未来について、

世界の終焉について語らぬのだ。

そもそも汝は何故に、永遠の沈黙者なのだ。

寂しき者は求める

現代人は金を見て笑う。地位を得てほほえむ。そうして何の寂しみすら知らないように見える。

星を見て、星の言葉を聞く人は少い。地上の花を見、草叢の露を見て、大地の神秘について考える人は少い。更に、無始無終に続く天地の間に今、生きておる神秘について、絶対の寂しさについて涙する人はない。私だけこうして永劫流転の我を抱いて絶対の寂しさにひたらねばならぬのか。

覚めた者は寂しい。何をもつておきかえようのない、何をもつて消すことの出来ぬ寂しさをもつ。寂しいと言つてじつとしていらぬ寂しさである。私の周囲には、にぎやかに人生を渡つて行ける人は集つて来ない。来た人も来た人も寂しい人である。心の傷をどうすることも出来ぬ寂しい人たちを見た時、私はたまらなく寂しい。私の力ではどうにも出来ぬから、と言つて色々なものに酔うて自分の魂を見失っている人を見れば更に淋しい。

あなたは淋しい人であつた。誰と語ることも出来ず、何でもまぎらすことも出来ぬ淋しさを持つた方であつた。そのあなたの前に、それよりももつと大きな淋しさを持つた人の世界に生れ出でたいのであり、生れ出づるものである。

あなたは私の住して頂く世界に往生した。それならばあなたの淋しさはなくなつたか。いいえ、もつと大きな寂しさがおそつては来なかつたか。

「人とお別れした寂しさをはじめて真に知りました。寂しい中に、指折つて待つ間の楽しみで御座います。三日間の講演はすぐすぎてしまいます。すぎてしまつて、先生をお送りする時の悲しさ、自動車の出てしまつた後の空虚。日がたつにつれて沈みきつた寂しさが私の全体をおおうてしまいます。けれどもこうした中にも心は常にお念仏に……」

それがあなたのみ心の全部である。寂しいのが嫌であるならば、目覚めないことである。目覚めた者は寂しい。さびしいが故に動き求める。そうして、光の世界に進む。求道は覚めたる寂しい人の心に生れる世界である。

真実の世界に生れ出んとする者は、善知識の世界に往生しなければならぬ。信ずる知識の世界に往生することが、やがてより大きな光の世界に往生することである。

親鸞聖人の味われた世界に生れ出ないでは親鸞聖人を知ることが出来ない。釈尊を知るということは釈尊の世界に往生することであり、弥陀を信ずるとは弥陀の世界に往生することである。

過去の多くの大宗教家も、大芸術家も大哲学者も、皆な寂しい人たちであつた。彼らは真に覚めた人たちであつたからである。もし少しでもそうした人たちの世界が知られて来た時、あなたもまた寂しい世界を持つた人となるのである。

聖者偉人の胸中

有名なる宗教学者がある。深淵なる学説がその口から説かれる。然るに時代はその学者をおきざりにして走つて逃げ、集つた民衆は何の関係もない路傍の人として見むきもしない。何故だろうか。彼は学者であつても人ではないからだ。いかめしい

肩書ではあつても、痛ましい衆生ではないからである。彼は哲学に飾られた学者ではあつても、偽らぬ心をなげ出して地にぬかずく涙の人でないからである。熱がないからである。寂しい世界を持たぬからである。議論も哲学もぬぎにした涙のながさと、寂しさを知らぬからだ。「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとへに親鸞一人が為なりけり。」と言つたり、「この上は念仏をとりて信じたてまつらんともまた棄てんとも面々の御はからいなり」といつた親鸞は決してにぎやかな人ではなかつたのだ。二河白道を説いた善導大師は、人の運命を、人一人おらない無限の曠野を西にむかつて旅する寂しさに譬えたではないか。天上天下唯我独尊と叫んだり、独生独死独去独来と教えた釈尊も亦、浮いたにぎやかな世界に生きた人ではないのだ。

十二人の使徒たちを残しておいて、一人ゲッセマネの園に入つて、神に祈り、いよいよ十字架にはりつけられて、死すべき運命の前に「アバ父よ爾において、凡ての事能はざるなし、この杯を我より取りたまへ。然れど我が欲ふところを成さんとするに非ず。爾が欲う所に任せたまえ。」と神に祈り、いよいよ十字架の上にはりつけられて息たえんとする時、「エリ、エリ、ラマサバクタニ」(吾神わが神何ぞ我をすてたもうやとすること。)と叫び、下より、海絨に醋をふくませてささげられ、それをすうて息のたえたキリストも断じてにぎやかな心ではあるまい。

道を説けど説けども、世の中に入れられなかつた孔子の心、真理のために毒杯を飲んで従容死についたソクラテスの心、「鳥は啼けども涙流れず、日蓮は泣かねど涙ひまなし。」と言つた日蓮の心、国家を思う真心は入れられず、多くの子弟や家来の血氣におされて官軍に弓を引き、ついに薩南、城山に自殺した大西郷の心事。

噫。彼ら偉人、聖者の全てが、地上の寂寥を味いつくしたのだ。

「覚めぬがよい。目覚めぬがよい。」

あなたにそうした心はないか。

愛の世界

寂しさを知らない者に真の愛はあり待ない。真に切るに切られぬ、一つにとけた愛の世界は、寂しさを持った者同志の間にだけ、生れて来るものなのだ。

「愛は、寂しさから生れる。」

魂の底に、この動かすべからざる命題が権威をもつてうなる。寂しい人は、一人一人でも失いたくない。皆の人に、至心信樂して、我が国に生れて来てくれといたくない。そこに魂と魂との融合うた一如の世界が生れて来る。

夫婦が真に愛しあう日も、親子が真に結ばれてある日も、師と弟子とが一つ世界を歩む日も、それは、真に淋しさに裏附けられた日のみである。

しかし、愛すれば愛するだけ、さびしくなり、愛しても愛しても、無限のさびしさがおそうて来る。それだから、人を求めることはやめたという人があるならば、それは、そこに腰を下していることの出来待る程度の寂しさである。

求めても求めても寂しい。それで満足ということがないままに、でもやめ得ない、やめえないままに飽く日がない。そこにほんとの愛の深い世界が転回されて来るのだ。

あなたが指折り数えて私が講演に行く日を待つて下さる心、それにひきつけられて飢え渴く如く走りつづける私、そうして三日間四日間がたつて、挨拶もしないで泣いて別れる時の寂しい心、その寂しいお互の心こそ、次ぎ次ぎと共につながりながら、やがて白道の上を浄土にむかつて精進せしめられる心ではないか。

「生命の創造はさびしい世界から生れる。」

さびしくない者は動かぬ。求めぬ。覚めやらぬ浮いたにぎやかな心には、芸術も道徳も宗教も生れたためしはあり得ない。

真仏のみ声

さびしい心に覚めたとは、永劫流転の我に目覚めたのであります。衆生たることに目覚めたのであります。無限の曠野に立てる我を見出したのであります。ちつともとどまることの出来ぬ我を見出したのであります。何ものを持つても如何ともすることの出来ぬ我を知ったのであります。一筋道を走らねばならぬ自分を知ったのであります。

おお覚めゆく心 無限の時と、無限の空

久遠の眠りから覚めゆく心！

無始無終に続く心の眠り！

六道輪廻の痛ましい様に覚めゆく心！

愛に覚め 迷に覚め

寂しさに覚め！

道を求め！ 人を求め！ 光を求め！

求め求めて、立ちあがる汝。智恵の眼を開いて前途を見よ！

黎明の光は汝の行手に輝き、汝のその精進努力を祝福するように、紫金の色は汝の行手を莊嚴しているではないか。

更に汝の智恵の耳をそばだてて聞けよ。平々坦々汝の歩む彼方から仏は

「汝一心正念にして直ちに來れ！ 我よく汝を護る……………」

とよびたもうてあるではないか。

我を救う真仏のみ声は、寂寥の汝の上へのみきかるるのである。天を仰いで星をながめ、地に伏して大地の静寂をきく。我にかえる時、我が口より念仏の出たもうを知る。

あやまられたる 悪人正機の救済

間違い

浄土真宗を外部からながめた者の一番大きなまちがいは、「悪人正機」「悪人成仏」ということでありましょう。道徳一点張りの人たちが、悪人成仏を批難するのはもちろんのこと、キリスト教の人たちが路傍に立つて、声をからして、「悪いことを何をしてもかまわぬ。悪いことをするものこそ助けられるのだ」という宗教がある。そんな馬鹿なことがどこの世界にあるか。」と攻撃しているのを聞くことは度々であります。

そうした門外漢がはきちがえていているのは、まだしもよいとして、浄土真宗の中に入っているという人の中にすら、一番間違っているのはこの悪人正機のみ救いであり
ます。

二つの世界

「善人なほもて往生を逐ぐ。いはんや悪人をや。」……悪人正機の世界

「悪人なほ往生す。いかにいはんや善人をや。」……善人正機の世界

人のすむ世界に二つの世界があります。これは二つの異つた世界の色彩であります。多くの人たちは、おぼろげながら善人正機の世界にすんでいます。自己に徹底した人がはじめて悪人正機の世界に出るのであります。前者は親鸞聖人や、法然聖人のすむ世界であり、後者は普通一般の人たちが呼吸している世界であります。

第一の世界は如来に生きる世界であり、第二は小さい自力に生きる世界であります。

第一は虚空のように広い世界であり、第二は狭い窮屈な世界であります。

第一は懺悔報謝の生活であり、第二は報酬を予想した権利義務、功利主義の生活であります。

第一は凡夫と自覚せる者の生活であり、第二は聖者、又は善人だと自らをゆるす人たちの生活であります。

危険

悪人成仏というこは地上で最後にたどりつくことの出来る世界であつて、徹頭徹尾、自分をあざむかぬ者のみが、恵まれて生きる世界であります。ですからあさましい人間世界の争いのみに心を奪われて、一度も深刻に自分を見たことのない人たちには幾度、悪人正機のみ救いを語つたとて何にもならぬことであり、自分という者よりも、極楽参りのみに心をとられている人に、悪人成仏を知らせることは危険極まることとあります。

悪人成仏の宗教はこれを弄ぶことになれば、正宗の名剣を狂人がもつたほど、幼児が剃刀を弄ぶほど、あぶないことであり、もしこれが生きて働けば百日の早天に大雨が降つたほど、死にかかつたものを生かすのであります。ですから自分をほんとうに知らない者、自己の発見の出来ない者が、仏のみ教を弄んでいたとて、衷心から覚める度におびやかされて、ほんとの安心も救いもあるものではないのであります。

乃木大将

明治十年の西南戦争に軍旗を敵の手に渡した乃木大将は、ゆるすべからざる不忠義の臣としての自覚がもととなつて、その一生は出るも入るも、明治大帝のみ心に生ききられました。厳肅なる大和魂の声を魂の奥底に聞く時、鋭い智恵光に照された時、しよせんはゆるすべからざる不忠、死にも値する乃木であります。しかし明治大帝の海の如き広くまします御仁慈は、そのまま乃木大将を生かしたのであります。大帝の、「乃木よ。乃木よ」の御召しにあう時、涙なくしては生きられぬのであります。大

和魂とは、砲煙弾雨の修羅の巷、命をかけものの戦場へでも、何等の批判をゆるさず
に「とびこんでゆけ！」のきびしい智恵の声であると共に、万民を赤子と思召す大御
心、慈悲の御涙が乃木の魂の底に湧き出すことであります。大和魂は智恵であり慈
悲であり、それが一つになって流れる日本人の生命であります。乃木大將は、智恵に
照されては悪人であり、慈悲より見れば陛下の一人子であります。そのまま、救われ
許されてあります。救われゆるされ生かされてあればこそ、ちつともじつとしている
ことをゆるさぬのであります。ここに計算や、功利心をはなれた報謝の生活が生れて
来ます。

日露戦争がすんで凱旋兵士が宇品港を上陸する時、將軍たちは、馬上意気揚々とし
て国民の前にその威勲を誇っています。然るに乃木將軍のみは、船室の中に、「ああ出
征する時には幾万の兵士をつれて出て行つたものを、今日凱旋する日、その中の幾人
が還つてくれるのだ。死なしてしまつた兵士たちの老いたる父母に、どの顔をさげて
合われよう。」これが將軍の血をはくような涙の声ではなかつたか。その何処に意気
揚々たる忠義顔がある。許すべからざる自己を見つめて泣くまに、明治大帝の唯一
の寵愛臣ではないか。陛下は、「乃木よ」とお召しになるではないか。

大將の一生は、物質を求めて生きたのでもない。地位を求めたのでもない、名誉にあこ
がれたのでもない。唯々つくしてもつくしきれぬ君恩に生きたのではないか。悪人
の自覚の上に立つた報謝ということさえ忘れた報謝の人であつたのではあるまいか。

二様の悪人

強盜殺人、欺偽遊惰にふけつていゝならずものが、我のいゝ悪人ではありませぬ。
否、彼はまだ心の中にはそれとなく、善人正機の世界の人かも知れませぬ。

人として見た時、一点の批難のないような美しい個性をもつた人でも悪人正機の広
い世界にすんでいます。

悪人には二様の悪人がいます。形式的な悪人と、内面的な悪人であります。あるい
は客観的の悪人と、主観的な悪人であります。乱倫な放縱生活を営んで平氣でいる
のは客観的の悪人であります。宗教上に言う悪人成仏とは必ずしもそうした悪人で
はないのであります。道德の世界では、この客観的悪人が斥けられるのであります。

主観的悪人とは、悪人たる自覚であり、目覚めであつて、全く心を見つめての鋭い
批判の上に立つて、自分に徹底したもののことでもあります。善導大師が、「自身はこれ
現に罪悪生死の凡夫、眩劫よりこのかた、常に没み、常に流転して出離の縁あること
なき身と知れ。」とおっしゃつたのも、源信和尚が「極重悪人」と自分をよんだのも、
法然上人が「十悪愚痴の法然房」と泣いたのも、親鸞上人が「いづれの行もおよびが
たき身なればとも地獄は一定すみかぞかし。」と言ひ、「愚禿」だと大地にぬかすい
たのも、それは皆、聖者たちの、天才宗教家たちの、きつきつき反省によつて生れ
た内的世界の風光であります。彼らは決して道德的な悪人ではなくて不朽の聖者た
ちであります。彼らは主観的悪人であつて、客観的な悪人ではなかつたのでありま
す。

「山田憲氏の信仰」

一、悪人罪を犯し聖者死刑となる

幾度読んでも涙するのは山田憲氏の信仰であります。山田憲氏は誰も知る如く豪商鈴木弁蔵をなぐり殺して、その死体を信濃川に流した大罪人であります。二年間獄中の生活を続けた彼は、大正十四年四月二日東京監獄で死刑になりました。

彼が鈴木を殺した時は、形の上では殺人罪を犯すほどの悪人でも、彼の心は鈴木を悪人と認めた善人でもあります。罪を犯す彼は国法上道徳上ゆるすべからざる悪人でありました。けれども、獄中二年の生活はついに彼をして、真に悪人正機の世界の人たらしめ、如来のみ心に救われて、拝みたいような大自覚と余光のうちに死刑になったのであります。彼は形の悪人から自覚の悪人に変ったのであります。もつと云えば、目覚めぬ悪人より、目覚めたる悪人に変ったのであります。これを主観的に言うならば、善人正機の世界から悪人正機の世界に生れ出たのであります。更に世界の人から言えば、悪人が人を殺し、聖者が死刑になったのであります。

「大無量寿経ノ会座将ニ終ラントスルニ際シ、仏、弥勒ニ告ゲテ曰ク、為得大利、為失大利、大悲ヲ信ズル者ハ即チ大利ヲ得、信ゼザルモノハ即チ大利ヲ失フト。不肖天下ニ罪アルモ、本願ハ悪人ヲ正機ト喚ビ給フ。至茲、報謝ノ称名相続セザラント欲スルモ、豈得ベケンヤ。嗚呼有難キ哉。煩惱即菩提ノ境」これは世間によく知られた、山田氏が諸先生に送った絶筆であります。

二、悪人正機の典型

「何事も自分の力で出来ると思う人は、ついには山田憲の様に亡びゆかねばならぬという事を多くの道行く学生に伝え下さい。」(真田増丸先生への言葉)

花散る四月二日

典獄「何かこの際言つて置く事があれば、何なりと聞いておいて君の意志に添うようにしてやるから……」

山田「有難うございます。別に申し上げることはありませんが、私は只今は絶対他力の信仰に生きておりますから、今日の死は、少しも恐れておりません。私はあれだけの大罪を犯したのでありますから、今日あるのは寧ろ当然の事と考えております。依つて今は人も恨まず、天も恨まず、従容として死に就く覚悟であります。何も申し上げることはありませんが、この二年の間、閣下をはじめ皆様方に一方ならぬ御厄介になりました。まことに有難く感謝いたしております。どうぞ皆様によりしく御願いたします。私は今は唯謝罪と感謝の外何物もありません。どうぞ皆様によりしく願います。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。」

「大最終！」

典獄「今やどうでしょう。」

山田「莞爾として今は全く平常と同じです。少しもかわりはありません。私はこの事がなかつたらきつと、物質に斃れたに相違ありません。今日精神界に生きる事が出て死ぬのは真に感謝に堪えません。」

いよいよ用意万端調いたれば、わずかに三十二歳の花の蕾をあたら刑上の露と消えんとする真際にも、

山田「皆さん御免なさい。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。」

ゴトン！

嗚呼、ついに山田憲氏の肉は永遠に逝った。然し魂は永久に甦る。時に大正十年四月二日午前十時四十六分。天は曇る。

こうした最後の話をうけ給ったのは氏の死後数日の後でありました。絶対他力の大道に一身を托し、私有の山田氏は亡び、公有の山田氏が生れました。私有の仏陀は亡び、公有の仏陀が生れました。私有の親鸞聖人は亡びて、公有の親鸞聖人が永遠に生れました。

「模倣に非ずして、行かずにはおられぬ一筋道をまつしぐらに進まれた魂は永遠に飛躍しているのであります。」(江沢黙童民)

一分の隙もゆるさぬ、悪人正機の目覚め、水ももらさぬ一念帰命の信念、罪惡の凡夫生されて、永遠の仏陀となる。悪人正機の典型、永遠の、大教訓である。

悪人自覚

私が私の善惡をはつきりと見つめないで、どうして道が見出せましょう。更に勝手手11
氣儘に惡を惡でいいのだと許して、その上に如来の教義をひっぱって来て間にあわしたと何になりましょう。一分のすぎなく、妥協せずに、我と我が機の善惡をはつきり見つめる時、しよせんは救うべからざる悪人であります。善惡を超えろとは、善惡を無視することではないのであります。いな見えなかつた善惡もはつきり見えて来ます。そうした善惡のはつきりした上で、私の惡は惡として知りつくすのであります。

「惡を行つてはならぬ。善いことをしなくてはならぬ。」それは何時の時にも何処に行つても正しい真理であります。信後と云わず、信前と云わず、「惡を行つてはならぬ。善には進まねばならぬ。」その制約の前に嚴肅に立つた時、善の裏には惡があり、善を行おうとしては、惡におもむく私の心の動きを悲泣せずにはいられませぬ。

親鸞聖人三十五歳の御年、法然聖人中心の吉水教団は、住蓮、安樂、西意、性願等の死刑、法然、親鸞両聖人の流罪となつて、ちりちりばらばらになつてしまいました。住みなれた京都、愛しあつた師弟、それに別れて、孤影肅然として北越のさびしい天地に投げ出された親鸞聖人のみ胸のうち、思い出しただけでも涙であります。学問も、道徳も、哲学も、法悦も、一切が間にあいませぬ。内観されるものは罪深き痛む心であります。行かねばなりません。たどらねばなりません。わき見もゆるされませぬ。妥協も出来ませぬ。無限の曠野に立つて、すすりなく魂を抱いて、大地の上に悲泣する者、それが親鸞の姿ではなかつたか。「愚禿」とはそうした久遠の凡夫、永劫流轉の衆生の姿をじつと見つめた聖人御自らの名のりでありました。

世の中を渡る時は善人らしい顔つきで、他人の善悪のみを裁き、如来救済の法話に
ようて天晴れ信心者顔のしたい者たちの、ひまのある世界と天地の差がありました。
悪人の自覚とは、一切衆生の痛ましい姿を、我のうえに見ることでもあります。久遠
の凡夫たることを痛感することでもあります。

流転の衆生

もう私は主観だとか客観だと全てをぬきにせねばなりません。しょせん私たちは、
凡夫であり、衆生であります。悪なくしては生きて行けぬ我であります。

清い世界にあこがれて清くなる能わず、善人たらんとして善人たる能わず、覚めん
として覚める能わず、真剣になろうとして真剣になる能わぬ、一步も、一寸も動かぬ
私であります。覚めて覚めぬ我を、如何ともなし得ぬのであります。

悪を悪としてゆるさず、悪人たることに泣いて如来のみ心の内に救われていること
を見出して法悦せる者は親鸞であり、悪を悪として自らゆるし、当然のこととして行
うて恥じないのは悪魔であります。地獄におつる者と、極楽を莊嚴する者との差は、
唯これだけであります。悪に泣いて如来の撰取の慈涙の中に調和された救済に微笑
む者は、悪人のままが浄土にめされる者であり、悪を平気で行うて、善人正機の世界
に自分を偽る者こそ、永劫の地獄に沈む者であります。

永劫流転の衆生の世界にこそ、如来のみ心と名号とは生れたもうのであります。